

六日、日本郵船佐渡丸に乗船す。先客に藤堂伯、山口三等軍醫正、古川寅太郎氏、渡瀬博士、小森、小田川、岡本、村橋の諸學士あり。

十二日、香港着。小森、安藤兩氏と共に市中を散策し、更に「ケーブルカー」に乗して、一千八百呎の最高點に登臨す。予は上海に寄港するの要用ある爲め、佐渡丸の諸氏と別れ、再び「アラトン、アブカ」號に便乗す。

忠僕トク  
タと別る

十七日、上海着。永瀧總領事を訪問し、豊陽館に投宿す。此夕從僕トクタと別る。トクタは纏頭回民にして、支那語を能くし、伊犁綏定縣の巡警たりしが、予該知事に請ふて帶同す。爾來八ヶ月、勤勉忠實終始渝る無く、洵に得易すからざる忠僕なり。別に臨み、新調の衣服と、外に百金を賞給して、從來の勤勞に酬い、且つ北京の知人に依頼し、伊犁に赴任する官吏に隨從して、歸郷せしむることとせり。此地滞在二月、長園、愚園を觀覽し、日本俱樂部の會食に出席し、請に應じて旅行談を爲す。

二十四日、神戸着。先着の安藤君來り迎ふ。午食を共にし、鐵路京都を經、西本願寺に大谷伯を訪ひ、長安に於ける謝意を述ぶ。

全旅行の

二十五日歸京復命す。